The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鷗外の怪奇小説 : 明治期の心霊学の流行との関連をめぐって
Author(s)	荘, 千慧
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2012, 46, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鷗外の怪奇小説

――明治期の心霊学の流行との関連をめぐって――

莊　千慧

キーワード：森鷗外、心霊学、怪奇小説

はじめに

森鷗外の短編小説の中で、怪奇的な雰囲気が漂う作品は多くある。たとえば、明治四四年に発表された『心中』では、「ひゆうひゆうと云ふ音」が聞こえるため、登場人物の女中たちが恐怖を覚える。明治四五年の『鼠坂』では、主人公の新聞記者は自分が殺した中国人の娘の亡霊を見たと思い、驚きのあまり死んだ。また、明治四〇年代に鷗外が翻訳した小説の内容にも、怪奇的な題材が多い。ちくま文庫の『文豪怪談傑作選』の『森鴎外集』では、鷗外の怪奇的な要素を取り込んだ創作・翻訳が収録されている。(1)

鷗外が明治四〇年代に翻訳した小説に〈怪異〉的な要素を取り込んだ経緯と意図に関しては多くの先行研究があるが、筆者は大きく二つにまとめられると考える。啓蒙の意図により紹介されたとするのがその一つであり、鷗外自身の嗜好の反映とするのがもう一つである。また、鷗外は同時代に翻訳のみならず、怪奇的な雰囲気のある小説

を発表しているが、これは同時期に行われた翻訳作業が影響したものであるとの指摘がある。[2] そのほか、「心理・意識面からのアプローチは、これらの物語（執筆者注：『藤鞆絵』[3]・『蛇』・『心中』・『鼠坂』・『百物語』などをさす）に「怪談」の性格を付与することになっている」と竹盛天雄が論じ[4]、鷗外はこの一連の作品群を通して「思想的哲学的小説」を「創出」したと指摘した。しかし、怪奇的な題材が明治四〇年代の鷗外作品に多く見られることに関して、先行論では、心霊学が流行していた時代背景が考量されていない。

本論では、第一節において、明治四〇年代に鷗外が翻訳した怪奇小説の創作時期と、当時の西洋での心霊研究の流行との関連について検討する。そして第二節では鷗外の心霊研究に関する理解を考察し、その結果を踏まえて、鷗外が明治四〇年代の日本社会における心霊学の流行をどれほど意識していたかを明らかにする。第三節では、明治四〇年代に鷗外が書いた怪奇小説に見られる共通点及び超自然的な題材の捉え方について検討する。その上で、同時代における心霊学の流行との関連性や、翻訳作品からの影響も視野に入れ、鷗外は怪異的な要素を自身の作品に取り込んだことと時代背景との関連性について考えたい。

一

明治四〇年代以降の鷗外は、明治四三年に『黄金杯』・『現代小品』、大正二年『十人十話』、大正四年『諸国物語』、大正八年『蛙』などの翻訳集を出版し、西洋の小説の翻訳に積極的な意欲を示したと言えよう。そしてこれらの翻訳小説の中には、怪奇的な題材を扱った作品が多い。改訂『水沫集』の序に[5]、鷗外が「玉を懐いて罪あり、Edgar Poe を読む人は更に Hoffmann に溯らざるべからず。此篇の如き、やや我嗜好に遠きものなるを、当時強い

て日刊新聞に訳載せしは、世の探偵小説を好む人々に、せめて此種の趣味を知らしめんと思ひしなり」という文章がある。鷗外がこのように述べた理由について、彼は当時「都新聞」の主筆の黒岩涙香が探偵小説を翻訳し、人気を得たことから、ヨーロッパの探偵小説が漸く日本に流行となるという兆しを念頭に置いたためであると小堀桂一郎が指摘した。[6] 鷗外は『水沫集』の時点から、啓蒙的な意図を以て、ホフマンやポーの作品を選んだと言えよう。明治四〇年代に入った後、鷗外が訳した怪奇小説の中で、明治四二年一一月に訳したヴィード（Gustav Wied, 1858-1914）の『午後一一時』は最も早い時期に訳されたものである。鷗外が同年六月に発表した『大発見』の中で、「キイドが流行児になつたらしい」という記述があり、『椋鳥通信』でも、ヴィードの戯曲の流行などの記事は一一件も紹介されている。この点において、鷗外が翻訳作品を選定する際、ドイツの文学界での流行も意識していると窺える。

しかしながら、啓蒙的な意図で西洋の小説を翻訳した鷗外は、なぜ西洋文学の中では通俗文学として芸術的に評価されていないゴシック小説[7]というジャンルの小説を選んだのか。まず、前掲の亀井氏によるゴシック小説の設定上における特徴の説明を援用して考えたい。

> ゴシック小説では、物語は恐怖の出来事の解消で決定的に終わる。例えば、物語の最後で、不可思議な出来事のすべてに物理的な因果関係に基づいた合理的説明があたえられる〈説明された超自然〉では、その説明の中で、不可思議と思われて来た諸部分を再度見直すことが指示され、それによって出来事の恐怖の性格が中和される。

伝統のゴシック小説の中で、超常現象は作品の結末に至ると、合理的な説明がつけられ、すべては幻覚にすぎないというような作品が多いという。[8] 一方、鷗外がドイツ滞在中にその小説を多く読んだホフマン（Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822）は、伝統のゴシック小説に新たな要素を取り込んだとされる。ホフマンの試みは、*Der Magnetiseur*（『磁気催眠術師』）[9] という作品から窺える。同作は、従来超自然的な題材を取り込んだゴシック小説・恐怖小説に科学的要素を導入した小説として画期的であるという。[10] 鷗外蔵書での『磁気催眠術師』は *Hoffmanns Werke* vol.2（『ホフマン作品集』第二巻）に収録されたものであり、この作品集では、編集者クルツによるホフマン紹介が掲載されている。この紹介文の情報と鷗外のホフマンへの言及とが類似していることから、今田淳は鷗外がこのクルツの紹介文からホフマンについて知識を得たと指摘した。[11] 鷗外文庫所蔵の『磁気催眠術師』に鷗外の書き込みがないが、同書に収録されている他作品での書き入れや前述したクルツの紹介文から、鷗外はこの『ホフマン作品集』を熟読していたと考えられる。

ヨーロッパでは一八世紀後半から一九世紀にかけて、心霊研究が盛んであった。心霊研究者は霊（独：Geist）の永続を信じており、「朦朧たる無意識心上に落ち来る刺戟ありて其強度に応じて其感知を脱して覚醒界に出現するを示す」[12] というように、超常現象は起こりうるものであると考える。怪奇的な題材を取り込みながら、〈迷信〉だと作品の結末に説明しなければならないというのは伝統のゴシック小説の手法だが、心霊研究での〈霊〉に関する概念の普及は、〈怪異〉の描き方に新たな可能性を与えた。たとえば、ホフマンが心霊研究の話題を作中に取り込んだことで、文学作品中の〈幽霊〉の存在は否定しなくてもよい存在となり、不可思議な出来事に合理的な解釈を付け加えない描き方を試みた。〈幻覚〉としか捉えず、味気なくなった超常現象の捉え方に変化が生じ、ほかの

作家の作品でも、怪奇的な題材を〈幻覚〉扱いと捉えず、怪奇体験の合理性を解釈せずに描くという作品が続々と発表された。[13]

伝統の西洋のゴシック小説では、超常現象は〈幻覚〉扱いであったが、心霊研究者が提唱する概念の取り入れにより、超常現象は起こりうるものとして捉えられ、読者に与えた〈恐怖〉感も増えた。鷗外は明治三〇年の小栗風葉の作品に関する評論で、「一体この作は幻と現との界をぼんやりにほはせる趣向と見えるが、E. Th. A. Hoffmann なんぞはさういふ方面で随分おもひ切つた事をやつて、非難は受けながらも一家をなして居るのだ」[14]と述べ、このような試みをしたホフマンの作品を「使人不覚慄然」[15]と評し、ホフマンの〈恐怖〉の描き方を称賛した。すでにホフマン作品での〈怪異〉の捉え方に注目していることがわかる。ホフマン作品での怪異の描き方を評価した鷗外は、翻訳作品を選定する際、前述したホフマンのほか、ポーの『鐘楼の悪魔』・フォルメラーの『正体』・シュトローブルの『刺絡』など、怪奇的な題材を〈幻覚〉扱いとしない作品も多く訳した。

一方、鷗外が怪奇的な題材を翻訳小説や自身の創作に多く取り入れた明治四〇年代の日本社会では、催眠術をはじめ、千里眼やテレパシーなどの心霊学が日本中に流行していた。次節では鷗外自身の心霊研究に対する理解及び明治期の心霊学の流行をどの程度認識していたかに関して検討したい。

二

自身の小説に「催眠術」や超常現象の題材を取り入れた鷗外は、心霊主義に関してどの程度の理解があったのか。鷗外の心霊主義に対する言及は、明治一八年五月三日に晩餐会に招かれた際、同席した「未亡人シユラデン

氏」の「神怪の事を好み、所謂幽霊説Spiritismusを信ず」とした記述が最初である（『独逸日記』）。東京大学図書館の鷗外文庫のデーターベースを調べたところ、心霊学に関連する書籍は相対的には多くないが、一九世紀のドイツの心霊研究に大きな影響を与えたカール・デュ・プレル（Carl du Prel, 1839-1899）の *Der Spiritismus*（『心霊主義』）があることは見逃せない。（一九世紀後半のドイツでは、イギリスの影響を受けて、超常現象に科学的検証を施す心霊研究が流行していたが、[16] 心理学・哲学の視点で捉える心霊研究を集大成してドイツに紹介した第一人者はこのデュ・プレルである。[17]）

なお、哲学者でありながら、心霊研究に強い関心を示したカント（Immanuel Kant, 1724-1804）の *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik*（『視霊者の夢』）も鷗外の蔵書に入っている。同書では「幽霊（Geist）と魂（Seele）[18] とは何であろうか？幽霊は物理的に存在しているのか？魂はどこにあるか？心と体とのコミュニティはどこにあるか？」というような問いかけがなされた。[19] そのほか、死後の生の概念及び一九世紀にヨーロッパの上流階級に流行した交霊会に関する詳しい説明が書かれている、モーリス・メーテルリンク（Maurice Maeterlinck, 1862-1949）の『死後の存続』[20] も鷗外の蔵書にある。また鷗外は、心霊研究の話題を取り込んだ西洋の文学作品、たとえばシラーの『群盗』Die Rauber を明治一八年一月にドレスデンで観劇したことがあり、ポー（Edgar Allan Poe , 1809-1849）の小説 *Mesmeristische Enthüllungen*（『催眠術の掲示』）や前節で述べたホフマンの『磁気催眠術師』なども、鷗外の蔵書に入っている。岩波書店の『鷗外全集』に掲載される書簡・随筆では心霊学に関する言及が少ないが、東京大学附属図書館の鷗外文庫のデーターベースによれば、彼はデュ・プレルをはじめ、ドイツの著名な心霊研究者の著書を購入しており、これらを読むことで、鷗外はドイツ留学中からド

イツでの心霊研究の風潮を認識していたと窺える。

一方、ドイツでの心霊研究の流行を注目していた鷗外は、日本社会での心霊学の流行をどれほど認識していたか。ここで、鷗外の日本社会での心霊研究の流行に対する関心を検討する前に、まず、鷗外は心霊学の論理を把握しながら、心霊学の論理に賛同していたところが見あたらないことに注目したい。むしろ、彼は心霊学のマイナス・イメージを強調している。たとえば、鷗外による新しい海外情報の翻訳紹介が掲載されている『椋鳥通信』[21]では、心霊研究関連の記事が紹介されている。西洋における心霊研究の最盛期は一九世紀であったが[22]、明治四二年三月から大正二年にわたって雑誌「スバル」に連載された『椋鳥通信』の中で、五度にわたり、心霊研究の話題に触れている。[23]これらの記事はほぼ、心霊研究の悪用による被害が記されている。実体験の反映ではあるが、明治四二年発表の『魔睡』では、催眠術の悪用疑惑が書かれている。大量の情報の中で、なぜ西洋では下火になりつつあった心霊研究による被害の記事が選ばれたのか。明治三九年に東京大学の教授である福来友吉が、甲府で行われた「学術講談会」で催眠の実験をしたように、[24]学術界では〈霊〉の存在を証明する実験に熱心であった。医学者をはじめとする、学術界で盛んに行われる、心霊現象の科学的実験に関して、鷗外が知らないとは考えがたい。一方、同年の五月から、「催眠術取締法」の制定が検討されていた。明治後期から大正初期の日本社会では、心霊学の流行は事実であるが、人々に与えたイメージは多様である。

大正五年に発表された鷗外の『渋江抽斎』における、抽斎の子・渋江保の紹介からも、心霊研究の持つマイナス・イメージが垣間見える。『渋江抽斎』での、「書估の誅求に応じて筆を走らせた」という渋江保の著作はジョーン・スッロムの『催眠術』をはじめとする心霊研究関連の訳書である。渋江保の創作では心霊研究に関する著作が

ないが、「羽化仙史」や「渋江不鳴」というペンネームで、彼は『活幽霊：怪奇小説』・『死霊の祟：怪談小説』などのようなオカルトの題材の小説を数多く発表した。鷗外は博文館で渋江保の著書を調べたことがあるため、渋江保の著作のジャンルを把握していると思われる。しかし、鷗外は「畢竟文士と書估との関係」を「パラジチスムになっている」という理由で、渋江保の執筆動機を弁明しているが、渋江保の著作の内容については、言及していない。鷗外は流行しながらも、マイナス・イメージを持たれてもいるという当時の心霊学に内包される様々な様相を意識しているため、抽斎の伝記を書く際、抽斎の子が心霊研究の著書を多数翻訳したことを隠したとも取れる態度を示したのではないか。

明治後期から大正初期の日本社会では、西洋伝来の心霊研究の影響で、超常現象の存在は学術の世界でも検討されるようになった。しかし、心霊学は学術界以外の人々にマイナス・イメージを持たれていたことは否めない。上述した悪用の頻発はこのようなイメージを抱かせる一因であるが、もう一つの理由は、鷗外の『青年』の一場面から窺える。主人公の小泉純一が「Spiritisme に関する、妙な迷信を持つてゐた」ある教師が言ったテレパシーらしき状態を「不愉快でならなかつ」たと思った。そしてその理由は、「五官を以てせずして、背後に受ける視線を感ずるのが、不愉快でならなかった」ためである。この引用から、催眠術やテレパシーなどの心霊学に好感を持たない理由に、心霊学の施術による、マインド・コントロールされるようなことに抵抗感を持つことがあげられるためである。

以上のように、明治後期からの日本社会では、心霊学は流行しながら、マイナス・イメージを抱えている（鷗外もそれを認識している）。しかし、それは〈霊〉の存在が疑われるためではない。心霊学を評価した鷗外の言論

は見当たらないが、心霊学の論理に重要な〈霊〉の存在に関して、彼はずっと注目していたと窺える。たとえば、前節にあげたカントの『視霊者の夢』もその一例であり、鷗外がヘルムホルツ（von H. Helmholtz, 1821-1894）の *Populäre wissenschaftliche vorträge*（『一般向け自然科学講義』）を読んだ時に 'Was ist Seele'（「霊とは何か」）という書きこみをした。そのほか、大正期に入った後でも、哲学思想にカントからの影響がありながら、その学説を批判するというF・フォン・シュレーゲル（F. von Schlegel, 1772-1829）の *Philosophie des Lebens*（鷗外は書名を『人生哲学』と訳す）を大正四年に読んだ時、シュレーゲルが述べた人間の「意識」の説明を分析した鷗外は、「悟性と意志とは精神 Geist に属して居て（中略）理性と空想とは霊魂 Seele に属し」ていると述べている。鷗外が Geist と Seele に関心を示した点に関しては別稿で詳述したいが、ここにも彼は長年〈霊〉をめぐる概念に注目したと窺える。では、心霊学の流行を認識しており、〈霊〉の概念に関心を持っていた鷗外がこの時代の中で、怪異的な題材をどのように自身の創作に取り込んだか、次節にて検討したい。

三

文明開化後、たとえば三遊亭円朝の『眞景累ヶ淵』では、「幽霊とは神経だ」といって、幽霊を見たことを〈幻覚〉として考えている。夏目漱石の『琴のそら音』（明治三八年）でも、近代社会での幽霊の存在を神経によるものだと称する場面がある。明治四四年に発表した鷗外の『百物語』では、「過ぎ去つた世の遺物」と主人公の「僕」が不可思議な出来事を称する。「有りさうにした主観までが、今は消え失せてしま」ったようになったため、幽霊の存在は文明開化後に否定された。そして超常現象が否定されたことによって、「人を引き附ける力がない」と同

作に〈現代の幽霊〉の魅力のなさが語られている。

西洋のゴシック小説での〈恐怖〉の描き方を賞賛し、多数の作品を訳した傍ら、鷗外が明治四〇年代に発表した小説の中でも、作品のテーマはそれぞれ異なるが、不可思議な出来事に対して、彼の翻訳小説と似通った捉え方をした作品が多い。たとえば、一例として、明治四五年に発表された『鼠坂』の一場面を引用する。

見えたのは紅唐紙で、それに「立春大吉」と書いてある。その吉の字が半分裂けて、ぶらりと下がつている。それを見てからは、小川は暗示を受けたやうに目をその壁から放すことが出来ない。（中略）あいつが仰向けに寝ていやがる。顎だけ見えて顔は見えない。どうかして顔が見たいものだ。あ。下唇が見える。右の口角から血が糸のやうに一筋流れている。」／　小川はきやつと声を立てて、半分起した体を背後へ倒した。

この引用した場面から、「脳溢血」で倒れる前の小川は亡くなった中国人の娘は本当に自分の前に現れたと思っていることがわかる。〈亡霊〉を見たこの場面を、小川の死者に対する畏怖感情が高まったため、幻視錯覚が生じたというように説明するのは〈近代的〉な捉え方だが、『鼠坂』では小川が〈亡霊〉を見たことを出来事のみ描き、不可思議な出来事の真否は論断されていない。そのほか、同時代の自然主義派の文学者らによる鷗外の文学作品に対する評価及び鷗外の対応・姿勢を風刺的な手法で描いた『不思議な鏡』（同四五年）では、主人公「己」は幽体離脱して、とある座敷の鏡へ吸い寄せられた。この作品は〈怪談〉として扱うべきではなく、風刺的な意図を持つ作品として読むべきだが、「己の体」から「己の魂」が抜けた際、「体」は「気が利かない」程度でいられるという設定から、肉体と魂は二元的なものであるという捉え方が窺え、魂は存在しているものというように本作は設定さ

れている。そしてこのような前提に、鷗外自身の〈霊〉の問題に対する関心が垣間見えるほか、明治後期の社会での、心霊研究の普及による〈霊〉の存在に関する概念の変化が窺える。

文明開化後、超自然的な事象の存在が否定され、文学作品での〈怪異〉の実在も否定され、〈幻覚〉によるものだという解釈が付けられるようになった。明治四三年の『蛇』では、蛇の存在は作品の結末に至って、科学的に説明されている。一方、『金毛羅』（明治四二年）では、小野博士という哲学者の子どもたちが百日咳に罹り、現代医学で治療したが、一人は亡くなり、もう一人の、助けられそうになかった子どもが突然治ったことが書かれている。小野博士の「奥さん」は、その結果が自身の見ていた夢と似ていたため、それが正夢だったと言い、ますます「金毛羅様」を信仰する。『蛇』と『金毛羅』から、鷗外は明治四〇年代に文学作品における科学と迷信の捉え方に注目していたと言えよう。前述したように、明治四〇年代の日本社会では、学術界をはじめ、心霊学に関する取り組みが流行していた。その流行により、文明開化後にその存在が否定された〈霊〉は存在しうるものという考え方も明治期の人々に紹介された。一九世紀のヨーロッパにおいて、心霊研究の流行により、新しい超常現象の捉え方が文学作品に取り込まれているが、鷗外は明治三〇年代にすでにホフマン小説での怪奇的な題材の新しい描き方を意識していた。鷗外は明治四〇年代に怪奇体験を〈幻覚〉扱いする作品のほか、『鼠坂』のような、不可思議な出来事の真否を論ぜず、客観的に出来事を描いた作品も書いた。怪奇的な題材をめぐり、多様な描き方を試み、多数の小説を発表したことは、鷗外の〈霊〉に対する関心の反映でありながら、このような時代状況が背景にあるため、実現できたのではないか。

そして鷗外が試みた超常現象の新しい捉え方は、大正から昭和初期まで、泉鏡花[25]と盟友らが開催した「怪談会」

の方針にも見られる。「怪談会」で話された怪談話は後に一冊にまとめられて出版された。その序に泉鏡花が怪奇現象に「訓戒のために寓意を談じ」ることを批判し、世の中に科学で解釈できないものがあることを認める。ここからは、超常体験の真否を問わない考え方が窺える。[26] 鷗外の怪奇小説は超常体験を〈幻覚〉扱いとしない点において、鏡花らと同じ趣向が見られるが、彼らより早くその描き方を試みたものと位置付けられる。

まとめ

本稿では明治四〇年代に鷗外が怪異的な題材を取り込んだ作品を多数発表したことと、当時の社会での流行との関係を中心に考察した。明治四〇年代の鷗外が翻訳した怪奇小説は、彼の創作に刺激を与えたと考えられる。これらの作品が生み出された社会的背景として、ヨーロッパと日本での心霊主義の流行がある。明治四〇年代に鷗外が発表した怪奇小説の中で、実体験による作品や科学的な分析をした作品はない訳ではないが、怪奇現象の有無を論じずに超常体験をそのまま描く作品も多く、これは明治期に入った後の文学作品における怪奇体験の捉え方とは異なっている。ドイツの恐怖小説では、古くからの超自然的な現象に対する考え方の変化を利用し、怪奇現象によって文学作品での面白さを加えるという試みが行われていた。そして文明開化後の日本でも、作家達が怪異的な題材の新たな描き方を試みる中で、鷗外はドイツの恐怖小説作家と似通った試みをして、明治四〇年代に一連の翻訳・創作小説を発表した。鷗外のこのような取り組みの背景に、明治後期からの心霊主義の流行の影響があると言えよう。

注

（1）東雅夫編『文豪怪談傑作選　森鴎外集』（筑摩書房、平成一八（二〇〇六）年八月一〇日）。

（2）たとえば、大島田人「鷗外の翻訳文学（三）――怪奇小説の系列――」はその一例である。（「明治大学泉校舎研究室紀要」第二二号、昭和四三（一九六三）年）。

（3）この作品が〈怪談〉のカテゴリに入れられることには再考の必要があると思われる。

（4）竹盛天雄「『不思議な鏡』から『ながし』まで」（『鷗外　その紋様』、小沢書店、昭和五九（一九八四）年七月、第七六一頁）。

（5）この序文に「明治三十八年四月森林太郎識」という一文があるが、発表されたのは明治三九（一九〇六）年である。

（6）『森鷗外――文業解題　翻訳篇』（昭和五七（一九八二）年、岩波書店、第六頁）。

（7）ゴシック小説（Gothic Romance）とは、一八世紀から一九世紀の初頭にかけてイギリスをはじめ、ヨーロッパで流行していた中世の封建社会を背景とし、幻想的・神秘的趣味の小説である。恐怖小説というジャンルは主にドイツの作家によるゴシック小説作品を指す。（ここでのゴシック小説に関する説明とそれの文学史的位置に関しては、『研究社・英米文学辞典』（第三版）の「Gothic romance」という見出し語につく説明を参照して作成したものである）。そしてドイツの恐怖小説の文学史的評価については、石川実が「恐怖小説は、単に芸術的価値の低い文学として軽視されるに留らず、激しく嫌悪され、忌避されるようになり、文学史から抹殺され、特に「国民文学」と結びつけて論ずることはタブーとなってしまった、という事情はその最大の理由であろう」と指摘したところから、文学史におけるゴシック小説の評価が窺える。（「ドイツの恐怖小説とゴシック小説」（『城と眩暈　ゴシックを読む』、国書刊行会、昭和五七（一九八二）年九月、第二一二頁）

（8）たとえば、アン・ラドクリフ（Ann Radcliffe, 1764-1823）の *The Mysteries of Udolpho*（『ユードルフォの秘密』）では〈幽霊らしき〉ものは結末の合理的な解釈により、幽霊ではないことが明らかになった。この時期に書かれた幽霊（もしくは〈幽霊らしき〉）ものが登場する小説に関して、モンターギュ・サマーズ（Montague Summers, 1880-1948）の *The Gothic Quest: a History of the Gothic Novel* に詳しい。

（9）*Hoffmanns Werke* vol.2, p.210-244（Leipzig, 出版年の記載なし）。なお、本書は鷗外が明治一二年に訳した『玉を懐いて罪あり』の使用底本でもある。

（10）亀井伸治『ドイツのゴシック小説』では、『磁気催眠術師』の歴史的状況を視野に入れ、先行研究による研究成果をまとめ、この作品を「科学的要素の導入が喚起する新たな恐怖の効果において、ヨーロッパの恐怖小説の歴史の中でのひとつの転回点となった」と指摘した。（彩流社、平成二一（二〇〇九）年一一月、第二九七頁）

（11）今田淳「森鷗外とE.T.A. ホフマン ― ホフマン受容史の一断面 ―」（「山口大学　独仏文学」第六号、昭和五九（一九八四）年、第五－六頁）。

（12）アッデイントン・ブルース『心霊の謎』（忽滑谷快天・門脇探玄訳、森江本店、明治四四年）。

（13）今本渉「ゴシック文学の幽霊」（『幽霊学入門』、新書館、平成二二（二〇一〇）年九月、第三九頁-第五一頁）や前掲の亀井氏の著書でも論じられている。また、『現代小品』に収録されている『午後十一時』の原題に、「或る神秘的・催眠術的体験」という副題がある（鷗外訳の時に省かれた）。作品の中では催眠術の施術風景を想起させる場面が見られる。

（14）『五分時間』（「めさまし草」「雲中語」巻二三、明治三〇年一一月二八日）。

（15）鷗外が留学中に購入した *Deutscher Novellenschatz*（『ドイツ短篇集』）所収の *Das Fraulein von Scudery*（『玉を懐いて罪あり』の原典）に記されている彼の読後感。

（16）同前掲コナン・ドイルの著書を参照。

（17）ドイツでの心霊研究におけるデュ・プレルの位置づけに関して、熊谷哲哉「カール・デュ・プレルの心霊研究における科学と発達」（「研究報告」第二四巻、平成二二（二〇一〇）年一二月）で詳述されている。

（18）鷗外の自筆書き込みによると、彼は Seele を「霊魂」に訳している。

（19）Karl Vorländer, *Volkstumchiche Geschichte der Philosophie* (1908)

（20）鷗外文庫に所存されているメーテルリンクの『死後の存続』は *Drei mystische Spiele : Die sieben Prinzessinnen, Alladino und Palomides, Der Tod des Tod des Tintagiles*（Diederichs, 1900）という選集に収録されている。

（21）『椋鳥通信』はドイツの新聞記事を元に、文学・美学・演劇学など、多様なジャンルにわたり、新しい海外情報が紹介されているコラムである。近代日本文壇における『椋鳥通信』の重要性に関して、小堀桂一郎が『森鷗外――文業解題（創作篇）』（岩波書店、昭和五七（一九八二）年一月）の中で詳しい検討が行われた。

（22）この時期のヨーロッパ社会における心霊主義・心霊研究の流行に関しては、従来多くの研究書に論じられていた。たとえば、コナン・ドイル（Conan Doyle, 1859-1930）の『コナン・ドイルの心霊学』（近藤千雄訳、潮文社、平成一四（二〇〇二）年）はその一つである。

（23）「Spiritismus の Medium だと云ふので伯林で興行してゐた Anna Abend は拘引せられて、詐偽の廉で罰金に処せられた」（第二年第二号（明治四二年一二月一三日））／②「伊太利に Zuccari といふ medium がゐる中乗をして見せるので名高い」（第一年第五号（明治四三（一九一〇）年三月五日））／③「近頃日本で千里眼と称する覆射の術は、（中略）近年 Lombroso, Hublier, Loewenfeld なぞが試験したが、皆詐偽であつた」（第三年第七号（明治四四年五月一日））／④「催眠術に罹つて白状した罪人に刑を加へた新例がある。」（第三年第七号（明治四四年五月一日））／「アメリカ人の Reese の透視に附いて、諸家の議論がある」（第五年第一一号（大正二年八月三一日））。

（24）「甲府の学術講談会、福来博士の催眠実験に喝采」（『読売新聞』、明治三九年一〇月二二日）。

（25）明治四〇年代以降、鏡花も怪奇的な題材を自身の多数の小説に取り込んだが、鏡花は「明らかに、世に二つの大いなる超自然力のあることを信ずる」（「おばけずきのいはれ少々と処女作」、『鏡花全集』第二八巻、岩波書店、第六七七頁）と述べる。彼が超常現象の存在を信じることは、社会背景の影響というより、自身の従来からの趣向によるものと言えよう。

（26）東雅夫編『鏡花百物語集』、ちくま文庫、平成二一（二〇〇九）年七月。

※使用テキストの引用はすべて『鷗外全集』（岩波書店、昭和四九（一九七四）年版）によった。なお、ドイツ語の文章の翻訳について、大阪大学・特別研究学生のノラ・バルテルス（Nora Bartels）氏にご協力いただきました。心から感謝いたします。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

論鷗外的怪奇小說與明治期的唯靈論流行之相關性

莊　　千　慧

森鷗外在明治四十年代裡發表了大量的翻譯作品，而這些作品中有許多都是以怪奇現象做為主題。同樣的時期裡，我們可以發現森鷗外的短篇小說中也有多篇是描寫著不可思議的故事。研究史上通常認為明治四十年代的鷗外小說中出現了許多這樣的題材乃是由於受到同時期翻譯作業的影響。但是卻忽略了鷗外為何在明治四十年代裡，不論是翻譯作品或小說上皆選擇了奇妙不可思議的題材這個問題點。事實上，探討靈魂存在的唯靈論者所倡導的催眠・心靈感應術（telepathy）等在當時的日本極為盛行，但先行研究中卻未曾將此社會背景與鷗外的創作動機結合。

鑑於上述的問題點，本論文中欲從此點切入，考察鷗外所翻譯的西洋恐怖小說的特徵，還有其與當時歐洲唯靈論盛行的關連性。再者，調查鷗外對唯靈論的理解程度，以及鷗外本身對當時日本社會的唯靈論風潮有多少程度的認知。本論將藉由上述的探討來闡明明治四十年代中鷗外所發表的這類以怪奇現象做為主題的小說群在文學史上的意義。